

創立 40 周年記念誌

40 jähriges Jubiläum des Bestehens der JDG.Akita

秋田日独協会

Japanisch-Deutsche Gesellschaft Akita



目次

・ 交流記念写真	
・ 巻頭言	
Dr.V.シュタンツェル駐日ドイツ大使閣下	1
穂積志秋田市長	2
J.ドゥッパー パッサウ市長	3
S.ラウシャー パッサウ独日会長	4
・ 発刊のことば	
松田至弘会長	5
・ 秋田日独協会40年のあゆみ	6
・ ドイツに寄せる思い	
～会員寄稿文～	9
・ 役員等名簿	38
・ 会員名簿	38
・ 規 約	40



秋田市－パッサウ市姉妹都市提携盟約書に調印する高田景次秋田市長と
Dr.エミール・ブリヒタパッサウ市長

1984年(昭和59年)4月8日・於パッサウ市正庁

－ 写真提供 秋田市 －



1988年 秋田市制作・姉妹都市パッサウ紹介パネル



1988年 パッサウ市民との交流会

パッサウ市内レストラン



1988年 児童交流

ノイシュティフト小学校



1990年 青少年スポーツ交流
国立公園“バイエルンの森”



1992年 パッサウ市より寄贈された“友情の鐘”
秋田市庁舎前広場設置



2009年 姉妹都市提携25周年記念式典 パッサウ市正庁



ドイツの街角





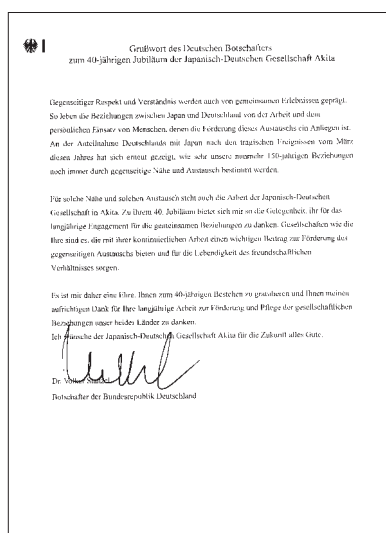
ご挨拶 —秋田日独協会40周年に寄せて—

ドイツ連邦共和国大使

ヴォルカー・シュタンツェル

相互の尊敬と理解を生み出す柱の一つが共通の体験です。日独関係も同様に交流促進を旨とする人々の活動と個人的な尽力に支えられております。今年3月の悲劇的な震災以降、ドイツは日本を大変気遣い心に懸けております。このことは、今や150年に及ぶ日独関係が、今尚、相互の親近感と交流によって育まれていることを改めて示すものです。

こうした親近感と交流の一翼を担っていらっしゃるのが貴秋田日独協会です。本年、貴秋田日独協会創立40周年に際して、この機会をお借りし、貴協会の長年のご尽力に感謝を申し上げますことを大変嬉しく思います。貴協会を初めとする各地の協会は、その不断のご尽力によって、相互交流促進に大きな貢献をされ、両国の友好関係の活性化に寄与されております。



こうしたことから、貴秋田日独協会創立40周年をお祝い申し上げ、日独両国市民社会の関係の維持・促進に対する長年のご尽力に心より感謝の意を捧げます。

貴秋田日独協会の今後のご成功ご多幸を祈念しております。



日独交流150周年
Jahre Freundschaft
Deutschland-Japan



秋田日独協会創立40周年記念祝辞

秋田市長 穂 積 志

秋田日独協会が設立40周年を迎えられましたことを、心よりお慶び申し上げます。貴協会が、ドイツの歴史、文化等に愛着を持たれた有志により、昭和47年に創立されて以来、長年にわたってドイツとの交流を深め、日独両国および秋田・パッサウ両市間の市民交流の推進および相互理解の促進に大きく貢献してこられたことに対し、深く敬意を表します。

本市は貴協会のご尽力により昭和59年にパッサウ市と姉妹都市提携をして以来、芸術、青少年スポーツ等の分野で交流を行ってまいりました。平成21年には姉妹都市提携25周年を迎え、パッサウ市で記念行事が行われましたが、私も多くの会員の皆様とともに出席したことは記憶に新しいところです。

ところで、本年3月11日に東日本大震災が発生しましたが、その直後から、パッサウ市で、日本を支援するための募金が行われました。パッサウ市、パッサウ独日協会などがチャリティコンサートを開催したほか、ドゥッパー市長を始めとして500以上の個人や団体から寄せられたご厚意は、総額3万5千ユーロ、約400万円に達し、本市に寄付されました。この多額に及ぶ寄付を、本市が行う被災者支援のためにいかようにも役立ててほしいとの申し出をパッサウ市長から受けましたが、これは貴協会が40年にわたって交流を積み重ね、築き上げた信頼関係の証と言えます。

本市では、パッサウ市から寄せられた寄付を、今夏の竿燈祭りに震災被災者を招待する事業にかかる費用の一部として使わせていただきました。これにより、秋田市民とパッサウ市民がともに被災された方々を励まし、またパッサウ市民の厚意を、被災された方々はもとより、全国から集まる観衆にも伝えることができました。

本市としては、今後もパッサウ市との姉妹都市交流を推進してまいりたいと考えておりますので、引き続き、皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

秋田日独協会の今後のますますのご発展、そして会員の皆様のご健勝をお祈り申し上げます。



祝 辞

パッサウ市長 ユルゲン・ドゥッパー

来る2012年2月14日、秋田日独協会が創立40周年を迎えられますことは、誠に喜ばしい限りです。

この特別な記念祭に際し、パッサウ市、パッサウ市議会議員、そして、パッサウ市民と共に心からお祝い申し上げます。

貴協会が秋田市とパッサウ市の姉妹都市締結の12年前に設立されていたことは、実に注目に値します。

長きにわたり民族間の相互理解に資する役割を果たされ、さらに、格別なる先見の明により、日本国とドイツ連邦共和国の国際連邦に貢献され、特筆すべきは、両市ならびに両市民間の緊密な友好関係を構築したことが挙げられます。

昨年は、日独修好通商150周年で慶賀の運びとなりました。

国家間、そして各界各層における各種催しは、両国間に相互の共感と、人々が互いに敬いあう精神に裏打ちされた歴史的共通性が存在することを示唆しました。

国境を越えて意思の疎通をはかるための重要な役割は、数十年におよぶ“パートナーシップ協会”が担っています。

両市の姉妹都市関係が公的な分野にとどまらず、市民生活に活かされていることに何よりも感謝の念を抱きます。

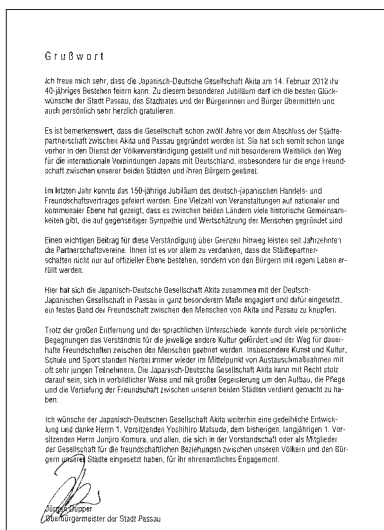
秋田日独協会はパッサウ日独協会との密接な連携のもと、秋田－パッサウ両市民間の友情の緊密化を果たすため、力を傾注されてこられました。

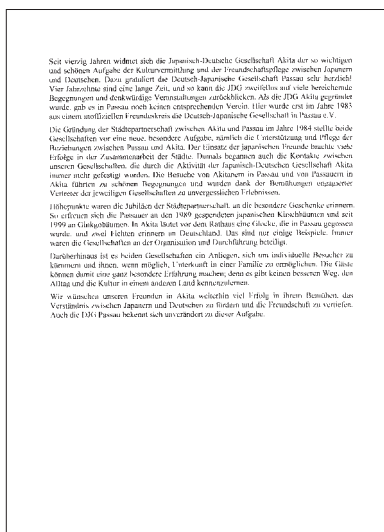
遠く距離を隔てていることや言葉の障壁を乗り越えて、数多くの人々の出逢いが、それぞれの異文化理解を促進し、人々の長きにわたる友情形成を日常化しました。

取り分け、芸術、文化、学校間そしてスポーツ分野において、しばしば若者たちの参加を得ながら、中心的な交流が展開されております。

秋田日独協会におかれましては、先駆的かつ懸命に両市間の友情の形成と促進、そして、深化に大きく貢献された事実を、大いなる誇りとされますように！

末尾になりますが、秋田日独協会がますます発展されるよう祈念し、松田至弘会長、長きにわたり会長職を務められた古村潤二郎氏、そして、両国民および両市民間の友好関係の構築に寄与された理事および会員の皆様方の“名誉ある社会参加”に、衷心より御礼申し上げます。





祝 辞

パッサウ独日協会 会長 **ズイビーレ・ラウシャー**

40年の長きにわたり秋田日独協会は、日本人とドイツ人間の文化交流と友好関係の構築を、重要かつ素晴らしい課題としてとらえ活動しています。

ここに、パッサウ独日協会は心からお祝いを申し上げます！

40年は長い時間であり、秋田日独協会は、その間における数多くの出逢いと、脳裏に記憶するに値する大切な行事を主催されたことに、思いを馳せることが適うでありましょう。

貴協会が創立されたとき、パッサウには対応すべき協会がありませんでした。

その後、1983年、非公式な“友好のサークル”を源とするパッサウ独日協会が設立されました。

1984年、秋田市－パッサウ市間の姉妹都市提携は、両協会に必然的に新しくかつ特別な課題、すなわち、パッサウ－秋田間の友好関係の支持と育成を目指すことを齎しました。

日本の友人たちは、両市間の協同作業を遂行するにあたり、多くの成功を導き出しました。

その時点から、時に秋田日独協会の活動性に触発され、両協

会の繋がりが、より緊密になり始めました。

秋田市民のパッサウ訪問、そして、パッサウ市民の秋田訪問は、素晴らしい出逢いを実現し、それぞれの協会の指導者たちの情熱は、記憶にとどまる体験の機会を具現化してくれました。

姉妹都市提携の周年事業は圧巻であり、その際の記念品は特筆に値します。

パッサウ市民は、1989年に寄贈を受けた日本の桜樹と1999年の公孫樹をととても喜んでおります。

秋田市では、パッサウ市で鋳造した鐘が庁舎前広場で鳴り響き、2本のドイツトウヒがドイツを思い起こさせてくれます。

そして、それらはほんの一例にすぎません。

両協会はあらゆる連絡調整と交流実践の機会に、関与してまいりました。

さらにまた両協会は、個々の訪問者の希望により、ホームステイを斡旋するなど交流支援を継続しております。

ゲストたちはその際、異国の日常生活と文化を体得するための最善な方法により、格別なる体験を享受できるのです。

最後に、秋田市の友人たちが日本とドイツの相互理解を促進し、友情を深化させるために為す活動が、今後も成功裏に行われることを切に願うものであります。

パッサウ独日協会もまた、変わることなくこの課題に取り組んでまいることをお誓い申し上げます。



秋田日独協会創立40周年を迎えて

秋田日独協会会長 松 田 至 弘

秋田日独協会は、ドイツの歴史や文化などに強く心をひかれた有志の方々によって、昭和47（1972）年2月に設立されました。

この度、創立40周年を迎えましたが、この間、会員の皆さんの努力と協力により、日本とドイツの相互理解・友好親善に努め今日に至ることができました。

日独交流150年直後の大変意義深い周年と位置付け、会員の皆さんとともにこれまでお世話になってきた関係各位に感謝し、記念誌を発刊して心から喜びたいと思います。協会の歩みや会員のドイツに寄せる思いを、記録して残すことは大切なことであります。

ところで、振り返ってみますと、昭和59（1984）年に秋田市とドイツのバイエルン州パッサウ市は姉妹都市提携を結んでおりますが、秋田日独協会は市に協力し、その提携に向けて大きな役割を果たすことができました。

協会はそのことを名誉に思い、パッサウ市民との交流を国際交流の中核に据え、活動を活発化させてきたところであります。

多くの協会員と市民が、パッサウ市を中心にドイツの諸都市を訪れ、芸術・文化、スポーツ、学校教育など多分野における交流が促進され、友好の絆が深まりました。

東日本大震災に対しても、パッサウの人々は心温まる援助を寄せられましたが、これもこれまでの交流の賜物と理解し、その行為と配慮に深く感謝しているところです。

日本とドイツは地理的には離れておりますが、類似した社会的特性を持ち、良きパートナーとしていろいろな分野で世界に貢献することが求められております。

今後も協会は、設立時と姉妹都市提携の精神を忘れることなく歩み、また、上記の期待にこたえるべく活動を一層充実させてまいりたいと思います。

最後になりましたが、この記念誌の発行にあたり、祝辞を寄せられた関係各位、寄稿者の皆さん、時間と労力を注ぎ諸連絡・編集等に難儀された方々に心から感謝しお礼を申し上げます。

●1972 (昭和47年)

1. 17 秋田日独協会設立のため、高田景次・神田金一・ベッケル神父ら市民10名で発起人有志会を開催する。
2. 14 秋田日独協会設立総会を開催する。(初代会長、渡辺武男秋田大学学長、代表幹事、高田景次・神田金一)
11. 16 駐日ドイツ大使グレーヴェ博士閣下公式訪問、歓迎昼食会を開催する。

●1974 (昭和49年)

3. 5 秋田日独協会役員及び有志懇談会で姉妹都市提携問題を協議する。

●1975年 (昭和50年)

5. 30 秋田日独協会3周年記念事業を行う。
(駐日ドイツ大使Dr.Wilhelm.G.Grewe閣下を秋田に迎える)
ドイツ音楽と文化講演の夕べ。
(於 秋田県民会館、参加者2,000名講師 菊池栄一東京大学名誉教授。ピアノ特別演奏 竹屋茂子)

●1976年 (昭和51年)

1. 16 高田景次市長、喜多川明常任理事を同伴して東京の在日ドイツ大使館でグレーヴェ大使と姉妹都市提携について懇談する。
2. 17 昭和51年度秋田日独協会総会を開催する。
7. 11 秋田聖霊女子短期大学音楽科生・OB一行70名、主として西ドイツに音楽親善交歓のため約20日間演奏旅行を行う。

●1977 (昭和52年)

3. 10 秋田日独協会創立5周年記念に「フランクフルトを訪ねて」を2,500部出版、日独関係者に配布する。
3. 22 常任理事・神田金一・喜多川明両氏がドイツ政府の招へいで訪独、約2週間西ドイツ南部の姉妹都市提携候補地を視察調査する。
4. 25 常任理事・神田金一・喜多川明両氏、親善都市懇談会で帰国報告をする。この報告によりパッサウ市が有力になる。
※この時点で秋田・パッサウ両市が友好都市となることに對しての推薦者：在日ドイツ大使館元参事官カール・F. ツァール博士、東北大学文学部教授松山武夫氏(カロッサ研究のためパッサウ留学)
8. 1 昭和52年度秋田日独協会総会を開催する。
- 8 秋田市文化団体連盟(寺田九空会長)一行30名が、パッサウ市で開催された「ヨーロッパ週間芸術祭」に参加する。市庁舎大ホールにて、日本の民謡、舞踊を披露する。

●1978年 (昭和53年)

6. 2 昭和53年度秋田日独協会総会を開催する。
6. 6 「ヨーロッパ週間芸術祭」に参加、寺田九空氏を団長とする秋田市芸術文化使節団27名がパッサウ市を訪問、前年に引き続き日本の民謡、音楽、舞踊を披露する。

●1979年 (昭和54年)

1. 25 南ドイツ新聞(東京)特派員G. ヒールシャー氏秋田魁政経懇談会で講演する。

6. 28 昭和54年度秋田日独協会総会を開催する。
11. 6 日独青年指導者セミナー訪日ドイツ代表团6名(社会教育担当)が来秋、歓迎会を開催する。

●1980年 (昭和55年)

4. 10 昭和55年度秋田日独協会総会を開催する。
6. 21 パッサウ市から市議会議員ヨゼフ・エダー、ハンス・マルティン・ブルケルト両氏が秋田市を親善訪問、歓迎する。
10. 12 大曲市の友好都市テトナング市代表团グラッセリー市長以下15名が秋田市を親善訪問する。

●1982年 (昭和57年)

5. 13 昭和57年度秋田日独協会総会を開催する。
7. 18 聖霊女子短期大学一行、ヨーロッパ演奏旅行を実施する。パッサウ市をはじめドイツ各都市で演奏し、好評を博する。パッサウ市では友好活動を展開する。
10. 16 駐日ドイツ大使クラウス・ブレヒ博士閣下を迎えて秋田日独協会創立10周年記念事業を行う。名誉会員としてクラウス・ブレヒ博士(駐日大使)、ゼップ・エダー氏(パッサウ市議会議員)、ハンス・マルティン・ブルケルト氏(パッサウ市議会議員)が推挙される。

●1983年 (昭和58年)

4. 4 フライブルク独日協会の前田幸康代表が来秋、歓迎する。
4. 25 昭和58年度秋田日独協会総会を開催する。
6. 30 秋田市友好文化交流使節団45名(古村潤二郎団長)、パッサウ市の「ヨーロッパ週間芸術祭」に参加する。プリヒタパッサウ市長が使節団に両市の関係を公的な姉妹都市にしたい旨を表明する。

●1984年 (昭和59年)

4. 8 秋田市とパッサウ市の姉妹都市調印式に参列する。
4. 27 姉妹都市調印を記念して、パッサウ独日協会副会長マルティン・テッシェンドルフ氏ら8名の友好代表团が来秋、調印披露の市民交流会を開催する。
5. 29 昭和59年度秋田日独協会総会を開催する。
11. 11 姉妹都市調印に祝意を表するため、新駐日ドイツ大使Dr. ヴァルター・ボス閣下夫妻来秋、歓迎夕食会を開催する。

●1985年 (昭和60年)

5. 16 姉妹都市調印1周年を記念して、パッサウ市からハンス・ヒューズル市長以下32名の友好訪問団が来秋、歓迎会を開催する。
5. 18 昭和60年度秋田日独協会総会を開催する。

●1986年 (昭和61年)

4. 9 第14代ハンブルク桜の女王ドリス・シュレーダー嬢を迎えて歓迎交流会を開催する。
5. 24 昭和61年度秋田日独協会総会を開催する。

●1987年 (昭和62年)

2. 14 湯沢日独協会設立総会に出席する。
5. 10 昭和62年度秋田日独協会総会を開催する。

9. 19 パッサウ大学学長カール・ハインツ・ポロック博士が来秋し、大学関係者および秋田市民と交流を図る。
9. 22 秋田水墨画協会によるパッサウ聖アンナ教会での展覧会に協力する。
10. 4 秋田日独協会創立15周年記念式典を開催、駐日ドイツ大使ハンス・ヨアヒム・ハリーヤ博士閣下が記念講演をする。
10. 19 姉妹都市提携3周年を記念した公式訪問団に参加する。（パッサウ市で竿燈を披露）
- 1988年（昭和63年）
3. 26 秋田大学で6年間ドイツ語講師をされたヴォルフガング・ベルクマン夫妻（特別会員）の送別会を開催する。
5. 8 秋田市民サッカーチーム42名がパッサウ市で親善試合を行う。
5. 30 昭和63年度秋田日独協会総会を開催する。
8. 1 秋田室内弦楽合奏団31名がパッサウ市を訪問する。
9. 8 「秋田ーパッサウ文化交流展」を文化会館で開催する。
10. 1 パッサウ大学から、ドイツ文学修士S.ヴィルナウアー女史が秋田大学ドイツ語講師に着任する。
- 1989年（平成元年）
4. 8 秋田市・パッサウ市姉妹都市提携5周年を記念して桜「関山」500本の贈呈植樹祭を行う。
5. 27 平成元年度秋田日独協会総会を開催する。
7. 11 パッサウ市長ハンス・ヒューズル氏を団長とする公式訪問団8名が秋田市制100周年記念式典参列のため来秋、歓迎会を開催する。
8. 1 パッサウ市青少年スポーツ交流団一行16名が来秋、歓迎会を開催する。
- 1990年（平成2年）
5. 26 平成2年度秋田日独協会総会を開催する。
6. 19 秋田市・パッサウ市姉妹都市提携5周年を記念して寄贈した桜「関山」の記念モニュメントを送付する。
- 1991年（平成3年）
2. 25 パッサウ新報社編集局次長R.ツィーグララー氏が来秋、親善交歓する。
6. 3 平成3年度秋田日独協会総会を開催する。
7. 29 パッサウ市青少年スポーツ交流団一行16名が来秋、歓迎会を開催する。
11. 19 秋田市公式訪問団に参加、パッサウ市を訪問する。
- 1992年（平成4年）
4. 17 パッサウ市長ヴィリー・シュメラー氏を団長とするパッサウ市公式訪問団が来秋、歓迎会を開催する。
6. 27 秋田日独協会創立20周年記念式典、記念祝賀会を開催する。
9. 18 秋田大学ドイツ語講師S.ヴィルナウアー女史の送別会を開催する。
- 1993年（平成5年）
6. 11 平成5年度秋田日独協会総会を開催する。
8. 7 パッサウ市青少年スポーツ交流団が来秋、歓迎会を開催する。
10. 15 駐日ドイツ大使館A.フォン・シュテヒョウ経済部長の講演会を開催する。
10. ミュンヘン医科大学生M.プリングスハイムさんの研修に協力する。
- 1994年（平成6年）
6. 17 平成6年度秋田日独協会総会を開催する。
11. 秋田市・パッサウ市姉妹都市提携10周年を記念しバッジを製作する。
- 1995年（平成7年）
1. 21 駐日ドイツ大使館Dr. シェール公使閣下講演会を開催する。
5. 29 「地域の国際交流に貢献する郵便局づくり」窓口竣工記念式典に参加する。
7. 1 平成7年度秋田日独協会総会を開催する。
10. 23 秋田日独音楽交流団主催「フライブルク・ドーム合唱団秋田講演会」に後援する。
12. 会員小松勝久氏のパッサウ市インシュタットビール会社での地ビール研究に協力する。
- 1996年（平成8年）
6. 15 平成8年度秋田日独協会総会を開催する。
6. 21 「パッサウ市民文化祭の旅」を主催する。
8. 2 駐日ドイツ大使Dr. ディークマン閣下の講演会を開催する。
- 1997年（平成9年）
3. 29 「青少年音楽の家」竣工式に参加する。
6. 27 平成9年度秋田日独協会総会を開催する。
8. 8 パッサウ市青少年スポーツ交流団歓迎会を開催する。
10. 26 秋田日独協会創立25周年記念式典を開催する。
- 1998年（平成10年）
6. 26 平成10年度秋田日独協会総会を開催する。
7. 9 駐日ドイツ大使ガーデンパーティに参加する。
7. 17 秋田ーパッサウ青少年スポーツ交流団結団式に参加する。
9. 1 ベラルーシウィーク・シンポジウムに参加する。
10. 20 駐日ドイツ大使館Dr.アウアー広報参事官の講演会を開催する。
- 1999年（平成11年）
3. 25 全国日独協会連合会総会に出席する。
6. 25 平成11年度秋田日独協会総会を開催する。
6. 27 「秋田ーパッサウ姉妹都市提携15周年記念訪問の旅」を催行する。
8. 18 パッサウ独日協会Prof. Dr. フェリックス会長歓迎会を開催する。
10. 22 ニーダーバイエルン芸術化連盟H. フーバー理事長歓迎会を開催する。
- 2000年（平成12年）
1. 22 青少年音楽の家代表羽川武氏による講演会開催
3. 16 全国日独協会連合会総会に出席する。
5. 23 平成12年度秋田日独協会総会を開催する。
7. 14 ハイデルベルク独日協会副会長シュナイダー氏との交流会を開催する。
- 2001年（平成13年）
1. 20 駐日ドイツ大使Dr.ケストナー閣下による講

- 演会を開催する。
3. 15 全国日独協会連合会総会に出席する。
 6. 30 平成13年度秋田日独協会総会を開催する。
 8. 25 「ワールドゲームズ2001年秋田大会」デュイスブルク市代表団歓迎会を開催する。
 12. 1 「ドイツ料理とワインの夕べ」を開催する
- 2002年（平成14年）
2. 2 聖霊女子短期大学A.デーケン教授の講演会を開催する。
 3. 1 全国日独協会連合会総会に出席する。
 6. 29 平成14年度秋田日独協会総会を開催する。
 8. 9 「PASSAU青少年スポーツ交流団」歓迎交流会を開催する。
- 2003年（平成15年）
2. 1 創立30周年記念式典ならびに2003年新年祝賀会を開催する。
 3. 19 平成14年度全国日独協会連合会総会に参加する。
 6. 28 平成15年度定時総会を開催する。
 8. 28 「エルマー・スラム ピアノリサイタル」（アトリオン音楽ホール）を開催する。
 10. 15～22 姉妹都市PASSAU市訪問団に参加する。
- 2004年（平成16年）
2. 7 2004年新年祝賀会を開催する。
 6. 25 湯沢日独協会総会に参加する。
 6. 26 平成16年度定時総会を開催する。
 7. 30～8. 12 「秋田PASSAU青少年スポーツ交流」を後援する。
 7. ～8. 「秋田市・PASSAU市姉妹都市提携20周年記念行事」を開催する。
 - ・7. PASSAU写真展（アルヴェ）
 - ・8. 2 記念式典および建都400年記念「姉妹都市合同晩餐会」
 - ・8. 26 エルマー・スラム ピアノコンサート
 - ・8. 27 エルマー・スラム歓迎会
- 2005年（平成17年）
2. 5 2005年新年祝賀会・糸井美樹子会員留学報告会を開催する。
 3. 22 全国日独協会連合会総会に参加する。
 6. 25 平成17年度定時総会を開催する。
 11. 4 エルマー・スラム氏歓迎交流会（共催：「青少年音楽の家」）を開催する。
- 2006年（平成18年）
1. 28 2006年新年祝賀会を開催する。
 6. 24 平成18年度定時総会を開催する。
- 2007年（平成19年）
2. 3 2007年新年祝賀会を開催する。
 6. 30 平成19年度定時総会を開催する。
- 2008年（平成20年）
1. 25 駐日ドイツ大使デア閣下講演会、創立35周年記念式典・新年祝賀会を開催する。
 3. 全国日独協会連合総会に参加する。
 6. 28 平成20年度定時総会を開催する。
- 2009年（平成21年）
2. 7 新年祝賀会を開催する。
 6. 27 平成21年度定時総会を開催する。
 10. 12～13 秋田市・PASSAU市姉妹都市交流25周年記念式典に参加する。
- 2010年（平成22年）
2. 13 新年祝賀会を開催する。
 7. 3 平成22年度定時総会を開催する。
- 2011年（平成23年）
2. 12 新年祝賀会を開催する。
 6. 25 平成23年度定時総会を開催する。
 7. 25～8.1 青少年スポーツ交流団 PASSAU派遣事業を後援（主催：秋田市体育協会）する。

ドイツとの思い出

顧問 古 村 潤二郎



平成9年7月7日、アイゼナハ・バルトブルグ城

ウ親善、18年パッサウ親善等パッサウには11回に亘り訪問した。当初考えもしなかった貴重な体験が出来たのも、全く日独協会のご縁だった。戦後日独両国とも敗戦国として負の遺産を負い、ひたすら経済復興に努め、漸くドイツのことも話題になりはじめていたが、一般にはまだ遠い存在であった。この時期に高田景次さんをはじめ秋田の知識人有志によって秋田日独協会が設立され、幾多の諸事情を克服し、市民草の根交流の基礎をつくり、今日に至っていることに改めて感銘を覚えるところです。この草の根交流こそが世界平和という大河の源流の一滴であることを確信し、今後とも歩み続けたいと願ってやみません。秋田市はドイツ・中国・ロシア・アメリカ等と友好交流があり、秋田市姉妹都市フォーラムとともに益々の発展を祈ります。

昭和58年日本海中部地震の直後、秋田市国際交流事業として、秋田女声合唱団を主体とする市民交流団の派遣がきまり、はからずもその団長として生まれてはじめてヨーロッパの地を踏み、秋田市・パッサウ市との親善交流を果たした。翌59年正式に姉妹都市の締結行事があったが、残念ながら出席出来なかった。

昭和60年中国蘭州市との3周年、62年パッサウ3周年、63年南米移民80周年、平成元年パッサウ5周年記念植樹、平成2年パッサウ青少年スポーツ交流、6年パッサウ10周年、8年パッサウ親善、11年パッサウ15周年、15年パッサウ



昭和58年7月4日、パッサウ

ブレーメンにて

糸 井 美樹子



初めて降り立ったドイツの地はブレーメンだった。大学2年の春休み、ドイツに関心のある学生を対象とした研修旅行を大学が企画し、参加者29名のうちの一人として一ヶ月の予定でドイツへ向かったのだが、はじめの二週間はブレーメンに滞在し、ホームステイをしながら語学研修を受けることになっていたのだ。

私がお世話になったのはKahnisさんという50代の女性で、息子と娘がそれぞれベルリンとミュンヘンの大学へ行っており、一人暮らしをしていた。Kahnisさんの提案で、每晚30分、ドイツ語の練習のために一緒に話をするようになった。その日あったこと、日本のこと、ドイツのこと、いろいろなことを話したけれども、Kahnisさんの生真面目さとドイツ語に対する厳しさに緊張してしまい、初めての海外生活に無我夢中で余裕もなく、思うように会話できない、踏み込めないというもどかしさがいつも残って、その時間を憂鬱に思ったことも正直あった。

二週間が経ち、明日はブレーメンを発つという晩。はじめてのことだったのだが、今日は外へ行こうとKahnisさんが言い、バスに乗ってラーツケラーに出かけた。ブレーメンの市庁舎の地下はレストランになっており、特にワインの品揃えが充実している。昼間は観光客が多いお店も夜になると地元の人が集まるのか、雰囲気や和やかで、もう遅い時間だというのにほぼ満席に近い。何とか空いている場所を探して二人で座り、白ワインで乾杯した。隣には老夫婦が座っており、その人たちに私のことを紹介しながら、Kahnisさんがにっこりと笑って言った。「まだ20歳、これから何でもできる。」ラーツケラーから出たあと、「ブレーメンで一番美味しいものを食べよう！」と言い、広場の片隅にあったソーセージの屋台に向かった。焼かれたソーセージをパンで挟み、まだ寒い3月のブレーメンの夜、肩を並べて二人で食べた。



はじめの頃のとっつきにくさ、とことんまで向き合う厳しさ、そして、その奥に隠れているあたかき。彼女を通して垣間見た「ドイツ」的なものについて、もっと知りたい。ブレーメンで得たその思いを抱えての日々だったと思う。20年近くが経った今でも、それは続いている。

ドイツに対する私の思い

伊 藤 静 子



秋田日独協会創立40周年おめでとうございます。

私とドイツとの交流は1988年11月18日からのことで、当時息子が通学していた小学校の親善交流団の訪問で始まりました。その頃まだ西ドイツと呼ばれていた頃のことです。その時私たちは現地パッサウ市で神学教師のMarianne Schlaffnerさん宅にホームステイさせてもらい、緊張しながらの2泊3日でした。

そして1991年にもドイツ訪問の機会があり、10月3日パッサウ訪問時は「東西ドイツ統一の日」でした。その時はドナウ川下りの旅にも参加させていただき、その雄大な眺めに感動した

ことを今でも思い出します。

その後もドイツ訪問しましたが、2009年10月の「秋田市ーパッサウ市姉妹都市提携25周年記念訪問」の際は夫と一緒に参加させていただきました。

それまで夫は私のドイツ訪問に殆ど興味を示していなかったのですが、私とドイツと一緒にいった所「素晴らしさは行かなければ分からないな」と驚いた様子でした。

この時のパッサウ訪問時には、私たちをいつまでも忘れずに会いにきてくれたパッサウの仲間たちと楽しく談笑する機会があり、その絆が一層深まりました。加えて聖シュティファン大聖堂にてパイプオルガンとトランペットの演奏を聴く機会に恵まれ、その音色の素晴らしさに改めて感動した次第です。

その後2011年3月11日、東日本大震災時には「何か私たちに出来ることはないか？」との心配の手紙を貰い、とても嬉しく思いました。

私は、今後もパッサウ市の人々とは「Lieder, die wie brücken sind」の歌詞に謳われている「時を超え、空間を超え、国境を超え、友情は永遠に結ばれる」の精神で、永くお付き合いしたい、と考えています。



「B O N N 回想録」

岩 井 真 二



同僚のブストラ女史と。
オフィスは、ポッペルスドルフ城近くのkönig straße
(ケーニヒシュトラッセ)。

私が勤めていたのは、外務省・農林省の外郭団体、(社)国際農業者交流協会の欧州支部。農業を志す日本と欧米の若者達を互いに派遣し、1～2年間農家実習と座学を通し、農業技術や国際感覚を習得させ、相互理解を深めさせ、ひいては世界平和に寄与させる事を目的とする事業で、昭和28年から現在までこの事業は続けられている。

私の役割は、欧州4ヶ国（ドイツ・スイス・オランダ・デンマーク）で日本人研修生の受入態勢を整え、現地の受入れ機関とセミナー等を企画し、研修生が無事に帰国するまでサポートする事、もう一つは、当時日本全国から多くの農業関連視察団が訪れたが、4ヶ国を中心に彼らの専門的な手配・同行等の便宜供与を請け負っていた。

私自身が、大潟村の2世でいずれは帰国して家業の農業を継ぐ予定だったが、ボンで思わぬ出会いがあった。当時は丁度、在ドイツ日本大使館には木村敬三大使がおられた。ドイツ語を学ばれた方は良くご存知の、秋田県五城目町出身「木村謹治」先生の御子息で、東西両ドイツ大使を歴任された唯一の外交官だった。私が大潟村の出身で、大使館で木村大使の部下だった私の妻も祖父母が横手・湯沢市の出身ということもあり、大使ご夫妻には公私にわたり特に可愛がって頂いた。

ドイツへの熱い思いは、とてもここには書ききれないが、今度は妻と、今は中学生になった娘二人を連れて、ドイツで暮らす旧友等が元気なうちに訪問したいと思っている。

私が、ボンにある駐在事務所にいた頃（1989～1994）、同僚のフォン・メングデン女史の誘いで、ボン独日協会に初めて出席させて頂いた。ドイツ人の多くの会員を前に、日本大使館員・プレスの方々と共に、「餅つき大会」など独日交流プログラムのお手伝いを楽しませて頂いたのが、つい先日の事の様に思い出される。

当時は、東西ドイツ統一前だったので BONN は首都。元々選帝侯ケルン大司教の居城に本館を置くボン大学中心の学生町だったが、戦後ベルリンから首都移転し、政府機関・各国大使館が軒を連ねる、国際色豊かなライン河畔の美しい都市となっていた。



ボン近郊のバラ農家。
Landersさん夫婦と（私と妻）クリスマス前の夕食に招かれて。

大塚 一雄



アーヘン市街

秋田日独協会の創立40周年をお祝い申し上げます。

日独協会へは、40年程前文部省在外研究員として1年間滞在していたドイツから帰国した時、冶金科の先生方の勧誘があって、入会させて頂きました。

私が滞在したアーヘン工科大は医学、文学など、多くの学部を持った、いわゆる総合大学でした。ドイツには、当時、アーヘンの他に、フライベルクとクラウスタールに私どもに関係する学部学科を持った大学がありましたが、当時のフライベルクは東ドイツに属していて、我が

国との国交がなかったので、アーヘンのロイター先生にお願いしたのです。

アーヘンには、鉱山学関係では私一人だけでしたが、慶応大学などと交換留学生の制度があり、日本の鉄鋼関係の会社などから、大勢の日本人留学生在がいた様で、後で知ったのですが50人近くの数だったようです。中でも上智大学の機械学科の先生には大変お世話になり、夏休みのスイス旅行などが特に思い出深いものです。

アーヘンは人口が25万程の温泉で有名な、静かな街です。ベルギーやオランダに近く、要塞マジノラインの残骸や第二次大戦でも激戦区だったようで大学構内のあちこちの建物に鉄砲弾のあとが見られましたし、校外にも戦争に関わる記念碑的な建造物が所々に見られました。

歴史的には古代ローマ帝国時代からの古い街で、特にフランク王国の国王カール大帝がピピン3世の後を受けて王位を継承し、パリから都を移し、西暦786年ごろから自らの戴冠式のために宮殿教会として建設を始めたと言うロマネスク様式の大聖堂があります。(現在北ヨーロッパ最古のものとして世界遺産に指定されています。)

写真はアーヘンの全景（中央にあるのが大聖堂）と聖堂の直ぐそばにあって、毎週市場が開かれていた市役所前の人出（マルクト）です。原版は40年前のフィルムです。言葉も十分ではなかったですが、大学の関係者の皆さんや日本人の皆さんの親切に支えられて、楽しい1年でした。



マルクト

『私の大好きな国 ドイツ』

加賀谷 ユウ子



「ビールもワインも飲めないなんて、ドイツに行く価値が半減じゃないの」とよく人に言われる。確かにそれは残念ではあるが、私にとってドイツはなぜか心引かれる魅力あふれる国なのである。

私がドイツに目覚めたのは、初めての海外旅行の行き先がドイツだった事。ホームステイを初体験し、ドイツ、特にパッサウ市の人々の誠実さ、暖かさに触れてしまった時からである。その時に知り合った友人達に会いたくて、訪問

が二度、三度となり、二十三年間に五回を数えた。もちろん周辺の国に足をのばすことはあっても、目的地は常にドイツ、パッサウ市である。その間、我が家にも数回ホームステイを受け入れたり、友人も徐々に増え、ドイツが我が家にとって最も身近な、大切な国になったのである。

もちろんドイツの風景、特に街並みも大好きだ。石畳の広場や小路、重厚で歴史感あふれる教会や市庁舎、ゆったり流れるドナウやイン河、河辺の散歩道の風も心地良く私達を包んでくれる。私にはまるで、遠くからよく来たねと暖かく迎えてくれるように感じるのである。この街が私の大好きな友人達を育み、又この街に生活する人々の一日一日が街の歴史をゆっくりと積み重ねてきたのだということが肌で感じられる。

二十数年の交流は私にかけがえのない宝物を与えてくれた。協会の四十周年に当たり、交流を維持、推進に努力してこられた方々に心から感謝を申し上げたい。

最後に我が家のとおきの話。ドナウ、ドナウジュニア、ライン、エルベ。我が家の代々の飼い犬の名前である。いつもドイツを身近に感じていたが所以の名付け。他にはめったにない良い名前と自負している。現在はラインとエルベが同居中。

いつか又「ただいま」といってドイツを訪れたい。きっと私の大好きなドイツは「おかえり」と言って迎えてくれることを期待して。

三河川の街パッサウにて

加賀谷 育 代



私がああ美しい街、パッサウに初めて出会ったのは今から23年前、私が11歳の時でした。まるで一枚の絵はがきをそのまま切り取ったようなその街への訪問は、その後の私の人生に大きな影響を与えるものとなりました。

人生初の海外旅行であった最初のドイツ訪問で、私はかけがえのない友人達と出会う事が出来ました。その時はドイツ語はもちろん、英語すら解らず、会話といえば旅行前に習った片言の挨拶のみ。それでもドイツ語が通じた時には

本当に嬉しかった事を覚えています。

この旅行をきっかけに私はドイツ語に興味を持ち、短大でドイツ語を学び、次はもう少し会話らしい会話ができる様になって友人達に会いに行きたいと思い、今も数人の仲間とドイツ語を勉強しています。

私は今までにドイツ以外の国へも旅行しましたが、他のどこの国よりもどうしてもドイツへ行きたいという思いが強く、この23年の間に更に2度ドイツを訪れました。2度目は最初の訪問から15年後、3度目は更にその8年後の事でした。毎回、行くのは10月か11月であった為、3度共とても寒い季節の訪問でしたが、そこにはいつも暖かく迎えてくれる友人達がいました。どんなに離れた場所に居ても私を忘れないでいてくれる友がいる事、そしてそんな友人達と出会えた奇跡に心から感謝しています。今度はその気持ちを直接自分の言葉で伝えられる様、今はもう少し頑張ってドイツ語を勉強しようと思っています。

ドイツ・パッサウ市との交流を体験して

加賀屋 誠 治



21年前、高清水小学校。
インシュタット小学校を訪問時の写真。

私がドイツと関わることになったきっかけは、今から21年前に高清水小学校に娘が在学中にパッサウ市のインシュタット小学校との交流訪問をするための生徒派遣団募集でした。

私自身1975年、当時アメリカ合衆国建国200年の年に社内派遣でアメリカを訪問し、1週間の民泊した事がそもそもの始まりです。

私は、民泊先で素晴らしい感動と感激を受けたことがきっかけとなっています。だから高清水小学校の派遣団募集があった時は、娘にも同じような感動を持ってもらいたいとの思いで即応募しました。

大森高清水校長先生を団長として一路パッサウ市に向け出発しました。インシュタット小学校に到着し、民泊引き受け先の家族と対面しました。

家族には暖かく受け入れて頂き、楽しい日々を過ごす事が出来ました。またパッサウ市、インシュタット小学校との交流行事とまたたく間に時間が過ぎて行きました。

この貴重な体験は親子共々決して忘れる事は出来ません。特に小学生だった娘には大きな体験、財産になったことと思います。

この交流がきっかけとなり、パッサウ市からのスポーツ交流団の民泊受け入れをし、約1週間日本の文化、秋田の生活をしていただきました。また娘は高校生の時にスポーツ交流団としてパッサウ市に行き、私の家で受け入れた家族に民泊させていただき、交流の輪が大きく広がったことを感じました。

私は、インシュタット小学校との交流以来活動はしていなくて、日独協会行事にもご無沙汰の状態でした。しかし日独協会で2009年秋田市・パッサウ姉妹都市提携25周年記念訪問の旅に派遣団募集の話を聞き、昔の気持ちの高まりが蘇って、またドイツ・パッサウ市に行こうという気持ちになりました。

19年前民泊して交流した家族と再会したいという思いと、ドイツの首都ベルリンに行ってみようと思うようになりました。

パッサウ市でインシュタット小学校を訪問し、民泊してお世話になった家族と再会することが出来て本当に感動的でした。19年前はお互いの子供達も小さく、また我々親達も若かったが再会した時は直ぐにわかり、固い握手をして喜び合いました。

またパッサウ市主催の交流行事等に参加し深い感動を受けたところであります。

私は、これ以来ドイツかぶれとなり、少しでも多くドイツ語で会話し交流して行けばいいなあと思います。

これから先もずっとドイツに興味を持ち、ドイツの人と交流し理解していければいいなあとつくづく感じています。

ドイツとの関わり

秋田日独協会会員 川 村 誠



1990.11.6、秋田市高清水小学校訪問団員インシュタット小学校を訪問。

平成2年11月1日、高清水小学校の一行が成田空港からドイツへ飛び立った。

それは、高清水小学校がパッサウ市のインシュタット小学校と姉妹校の調印式に出席する為に、大森校長先生を団長とし生徒11人、保護者11人、通訳として渋谷義博氏、学校関係者として堀先生の一行25名が親善交流訪問団としてドイツ、パッサウ市へ向かった。その中に、息子と私がメンバーの一員として入っていました。

その時、まさか今日までドイツとの関わりが続くことに成ろうとはまったく考えもつきませんでした。

私が日独協会の一員として20年以上もパッサウ市民と交流が続いている訳はインシュタット小学校での歓迎パーティーの会場での出来事が発端になっております。ホームステイ先のカール・ズィネック氏と体協の会長であるロナルド・ツィーグラー氏が何故、自分達は子供達の交流を大事に考え続けているかを熱弁を奮って語りかけてくれました。（東西ベルリンの壁が崩壊したのが丁度1年前のことでした）我々の子供が大人に成ったとき世界の紛争に巻き込まれ、貴方がたの子供と銃を持って戦わなければならない場面に出会ったとき、彼らは決して銃で解決するのではなく必ず話し合いで解決することを期待して、この活動を真剣に考え実行していると聞かされた私は、目から鱗が落ちる思いをしました。

それ以来、自分達に出来る事は何かと考えるようになり、青少年スポーツ交流では4回、教育関係者を1回計5回のホストファミリーを引き受け、少しでもお役に立てばと思ってきました。

最初の訪独時にホストファミリーであったズィネック一家とは今でも交流を深めており私達を秋田のパパ・ママと呼んでくれております。ズィネック家族と私の家族は青少年スポーツ交流などを通して互いの家を訪問し、宿泊をし、今では、ドイツでは親しい友人と話をするとき使うdu言葉で話し、文通をするような間柄になっております。

2回目の訪独、石川市長時代（故高田景次氏と同行）

3回目の訪独、佐竹市長時代（妻と初めての海外旅行）

4回目の訪独、穂積市長同行、4回のパッサウ訪問を経験し、多くのパッサウ市民と交流するようになり、私にとっては海外の第二の故郷を感じさせる魅力いっぱいの町、それがパッサウ市です。

近い将来5度目の訪独をと、心ひそかに思いをめぐらせております。

佐川光男

このケールシュタインに登る中腹の高原オーバーザルツブルグー帯もまた景勝地でここにはヒトラー総統お気に入りの別荘がありました。ご存じの方もおありでしょうが歴史の小話を少々書かせて頂きます。

そして瞬く間にオーストリア全土が併合されてしまったのです。ナチスの秘密黨員が、オースト

リア政府内部や警察、軍部にも相当多数はびこっていたのでは、実際有効な対抗手段は無かったのではないのでしょうか。このころの情勢については映画「サウンド オブ ミュージック」をご覧になった方々には既にご承知のとおりです。当時オーストリアの人口は650万人、国土面積83,850平方キロメートル、日本の面積の22パーセントの小国でした。

私は旅をするのは、かならず妻と二人連れです。妻も私同様の歴史ファンなので旅の思い出をいつも共有しているのです。

この原稿内容は、塚本哲也氏の著書「ハプスブルク家最後の皇女・エリザベート」から借用させて頂いた部分があることをお断りします。



塩 田 睦 子



石畳の教会の前で中世のヨーロッパ人（？）になった、と思いました。20年前のことです。初めて私の描いていたヨーロッパ・ドイツに佇んでいたのです。ただただ勝手にこの異国が自分のイメージしていた国であったかと、サワサワと新しい血が流れる感覚です。

「ドイツ人は歴史を、学ぶというより『歴史から学ぶ』のです」と誰かが言っていた言葉が思い出されました。そういえばどの町も、往時と戦争の傷跡を残しながら再生した平和な美し

い街並みを作り上げていました。例えばベルリンではメインストリートにあるカイザー・ヴィルヘルム教会などは目を覆いたくなる悲しい姿で建っています。しかし、いや、むしろ「この姿をよく目を凝らしてごらん下さい。再びこのような姿になってもいいのですか。愚かな過ちを再び起こすのですか？」と問いかけているのでしょうか。ポツダムでは、サンスーシーやツェツィーリエンホーフ宮殿と新宮殿のように、ドイツ史そのものや役割を痛く美しく伝えていきます。「なぜ、ドイツの街がこんなにも美しいのだろうか」とずっと考えています。近隣のヨーロッパも含めて何度国境線が変わってきたことでしょうか。永遠でありたい祖国への愛おしさが“美”となって表現されているのでしょうか。

わが姉妹都市のパスサウも、町中が淡いオレンジのようなピーチのような建物群です。おとぎの国のようなようです。窓辺のベラニウムは各家々から垂れて自慢げに咲き誇っています。2度目に訪れた1992年は秋田日独協会創立20周年の時でした。その際その年の春に秋田を訪問したご婦人が自作の詩を朗読されました。その一節に「あなたの一日は我らの真夜中に始まる。あなたの国の人々が眠っている時、私たちは目覚めている。お互いに目覚めていようではないか。人間の平和を脅かす悪を認識するために」とありました。そういう眼差しで日常的に平和を願う心に感動したものでした。

それにしても、旅は道連れ。同行した仲間と毎晩よくビールを飲みました。ドイツが好きな一番の理由はここにあったのかー。

2011年秋



日本の桜「関山」五百本を植樹！

渋谷 義博

ドイツ連邦共和国バイエルン州パッサウ市には、日独の友好親善を深め、取り分け、姉妹都市秋田市との友情を深化させることを目的に、1983年（昭和58年）に設立されたパッサウ独日協会がある。

筆者はこれまで、同協会のS. ラウシャー会長、協会創設者であるM. テッシェンドルフ副会長をはじめ多くの会員との知遇を得る機会に恵まれた。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災に際しては、パッサウ市で義援金市民募金活動をはじめにあって相談を受け、その負託に応えるため微力を尽くしたところである。

成果品は、35,000ユーロ＝約400万円になり、同年5月17日入金を確認した秋田市は、震災支援活動の一環として、8月開催の“竿灯祭り”に被災者を招待する費用に充てることとした。

パッサウ独日協会やパッサウ市民が、日本の窮状を救済するための一助として起こした善意あふれる行動が、秋田市とパッサウ市、ひいては日本とドイツの友好関係をさらに緊密にすることに寄与したことは論ずるまでもない。

さて、皆様は、平成元年4月、秋田日独協会の市民募金活動により実現した次の出来事を覚えておられるでしょうか？

パッサウ独日協会のホームページには、



平成元年4月8日、パッサウ市で植樹式に臨む
故高田景次秋田市長

「Japanische Kirschbaeume in Passau : Im Jahre 1989 ueberbrachte eine Delegation von Buergern der Stadt Akita zusammen mit Herrn Oberbuergermeister Takada 500 kleine Kirschbaeume als Geschenk an die Stadt Passau. Am 8.4.89 erfolgt die symbolische Pflanzung einiger Baeumchen an der Fritz-Schaeffer-Promenade. Die uebrigen Baeume wurden ueber das ganz Stadtgebiet verteilt eingepflanzt. ...In Passau koennen die Baeume im Zeitraum von etwa Mitte April bis Anfang Mai in voller Bluete bewundert werden.」

と記述されており、抄訳は次のとおりである；
「1989年4月8日、高田景次市長を団長とする秋田市訪問団により、パッサウ市へ500本の桜の苗木が贈呈されました。フリッツ・シェーファー・プロメナーデで植樹式が執り行われ、市立公園のカインツェンヴェークには桜並木を造成、また、市内の各種公共施設にも移植されました。桜花は毎年4月中旬から5月初旬にかけて、美しく咲き誇ることでしょう！」

秋田市とパッサウ市は姉妹都市を締結して早27年になるが、今でも私たちがパッサウを訪れたときは必ずと言って良いくらい、パッサウ市長の挨拶の中で上述の友好の歴史が披瀝され、「春爛漫を告げる桜に想いを託し、両市の友情が様々な分野で芽生え、開花し、やがて結実することを願う」と締めくくられる。

“ヨーロッパ文化移入の窓口”として確固たる存在感を示すパッサウは、秋田市のかけがえのない“心の財産”であり、秋田市民との交流を支持し、友情の形成に力を傾注することを惜しまないパッサウ独日協会は、私達の無二の親友である。

本協会はこれからも尚一層、パッサウ独日協会との連携を密にしながら、両市民間交流の発展を願い、地道な活動を継続していくことをテーゼ（These）としたい。

—— 平成元年 4月20日発行 広報あきた ——

No. 1133

平成元年 4月20日 発行

(毎月1日・10日・20日発行)

広報 **あきた**

発行 秋田市政府
〒010秋田市山王一丁目1番1号
編集 企画調整部広報課(03)2222(代表)

人口のうごき (1.3.31)

人口 297,912人	出生 278人
男 142,305人	死亡 135人
女 155,607人	転入 2,574人
	転出 4,854人

世帯数100,792世帯 (3月分)

友情の“開花”願い



ドナウ河畔に桜の植樹＝左から高田市長、佐藤由美子さん、ヒューズ市長

桜の苗木500本をパッサウ市へ ドナウ河畔で記念植樹

姉妹都市提携五周年を記念し、四月七日、高田市長ほか十人が西ドイツのパッサウ市を訪ね、両市友好のあかしに桜の苗木五百本を贈った後、大勢の市民が見守る中、市庁舎近くのドナウ河畔に植樹しました。この苗木は、市民のみなさんから募った寄付金で購入したものです。たくさんのご寄付をありがとうございました。

「桜植樹訪問団」は、高田市長、渡路市議会議長、古村秋田日独協会副会長、市民有志のみなさんなど十一人。一行は、四月五日に秋田を出発し、七日にパッサウ市入りしました。市庁舎で苗木の贈呈式を終えた後、翌八日、市庁舎近くのドナウ河畔、フリッツ・シュフナー・プロムナードに記念植樹しました。植樹には、ハンス・ヒューズ市長をはじめ二百人のパッサウ市民が参加。両市友好のシンボル、の誕生を祝いました。

この植樹式のほか、一行はインシュタット小学校を訪ねたり、市民交流会に出席したりして交流を深め、十二日、無事帰国しました。

見事に結実した市民の温かい善意

このたびの苗木贈呈に至ったのは、美しい桜を両市友好のあかしとして末長く後世に伝えたいという秋田市の意向に秋田日独協会が賛同し、広く市民に寄付を呼びかけたのが発端です。集まった寄付金は、二百八十九人のかたから合計四百四十七万円、おかげで、八重松「関山」の苗木五百本を購入することができました。遠く異国の地パッサウ市に、友



インシュタット小学校で子どもたちの大歓迎を受けた訪問団のみなさん

姉妹都市提携
5周年

ブンデスリーガ

菅 沼 隆



北から Wolfsburg、Gelsenkirchen、Bochum、Dortmund、Mönchengladbach、Köln、Stuttgart、Freiburg、Augsburg、München。平成23年9月末時点で10人の男子日本人サッカー選手がこれらの都市を拠点とするブンデスリーガのチームに所属している。

私とサッカー観戦の出会いは平成18年。たまたまNHKでガンバ大阪の試合が放送されていて試合運びに魅了されてしまった。以来、ファンと化し、ガンバを通してサッカーに興味を覚

えたのである。

平成19年、アジアカップの試合がTV放映された。そこで見た高原直泰のプレーが他の日本人選手とは別次元のように見え、とても印象に残った。そのとき彼はフランクフルトに所属していたので、その年の11月に行ったドイツで初めてサッカー観戦をプログラムに入れた。対戦相手はシュトゥットガルト。順位はフランクフルトより上。チケットは完売だったが駄目もとで会場に行ってみると35ユーロで入手できた。

試合当日は、フランクフルト駅から鉄道で行ったが、いたるところでビールをラッパ飲みしながら氣勢をあげるサポーターの姿を目にした。また、ビールの空き瓶もあっちこっちに散らかっていたが、このあたりの光景はだいぶ日本とは違う。

当日の観客は51,500人。一部のアウェーサポを除き、野太い声が会場中にこだましスタジアムが一体となってホームチームを応援した。当時の埼玉スタジアムでの浦和レッズのサポーターの迫力もかなりのものがあると思ったが、それを上回る一体感を感じた。

特に印象的だったのが、アナウンスの最後を「ダンケ」で締めくくると、一斉に「ビッテ」と返すこと。

また、お目当ての高原は途中出場だったが、「ナオヒロ」のアナウンスに、サポーターが続けて「タカハラ」と一斉に声をかけたのは「ビッテ」同様、新鮮な驚きがあった。

結局試合は1対4でフランクフルトが負けたが、ブンデスリーガ・観戦デビューはとても印象深いものだった。



今、久しぶりに「ドイツでのプレーを見たい」と思う選手がいるので、ぜひともドイツ旅行をしたいと思う今日この頃である。

私のドイツ語・それは歌から始まった。そして秋田弁が背中を押した。

添 野 武 彦

およそ半世紀前。私が中学1年生になった頃、ある文部省推薦映画が生徒達に紹介された。テレビの未だ普及していない当時、映画鑑賞は子供は勿論、日本人全体の大きな娯楽の一つであった。ニュース映画からは、生々しい世の中の動きを知りえたし、スポーツニュースからはスター選手の動きに興奮し、劇映画からは何らかの感度を得ていた。そんなところにドイツ映画の【菩提樹】という題名の映画が紹介されたのである。程なくしてある土曜日の夕方、両親に連れて行ってもらって鑑賞した。映画は狭いスクリーンながらも、映し出された総天然色（当時はこちらで言う）の



ドイツの街角 “ミュンヘンの花屋”

画面には、オーストリアの美しい風景を背景にした物語が展開されていった。後半【サウンド・オブ・ミュージック】で有名になった、トラップファミリーが故国オーストリアを逃れてアメリカに亡命するまでの話である。純情な少年であった私は、主演女優のルート・ロイヴェリクの美しさも然ることながら、歌われたテーマ曲であった《菩提樹》の言葉の心地良さ、曲の美しさに魅了されてしまった。話されている言葉は、英語を習い始めたばかりの身には理解不能であったが、『あっ、そう！』と聞こえた音に「あっ、そう！」と字幕翻訳が出たのを見て、ドイツ人も日本語と同じ言葉を話すのか？と早合点してしまった。勿論、本格的にドイツ語を学んでからは《Ach So!》と言ったのだとは解ったが。また、父が旧制高校でドイツ語を選択していて、家庭でも下手ながら、教科書か何かを音読していたのを時々耳にしていたせいも、英語とは違った響きに興味を惹かれた。

大学に入って第二外国語としてドイツ語が必修となつてからは、早速、シューベルトの《冬の旅》の楽譜を買い求めた。《菩提樹》の原詩を訳してみたかったことと、発音は歌から入るのが手取り早いと考えたからである。これを手始めに、旺文社の大学入試講座で流されていた《Freud euch des Lebens》、《小鳥ならば》《ドイツ国歌(旧)》《野ばら》などを歌い、歌詞を覚えていった。すると試験では、歌から覚えたドイツ語が思わぬところで役に立った。間接話法の試験で《小鳥ならば》の歌詞がそれである。『Wenn ich ein Voeglein waere, und auch zwei Fluegelein haette ; floeg' ich zu dir...』という歌詞をそのままに、設問の単語に変えて配置すれば、簡単に解けたのであった。そんなことに気を良くして、ドイツ語にますますのめり込んでいって、今日の私となった。ドイツ語、英語、中国語、(秋田弁) など幾つかの言葉を習ってみて、言葉は音楽特に歌だ！微妙な外国語の発音は秋田弁が基礎だ！とは短い人生の中で私なりの結論である。何故ならば秋田弁には、標準語にはない曖昧な発音をもっているから、ドイツ語などの外国語の音を学ぶには理解しやすく、音楽的を絡めると再現しやすいから。

パッサウ州立図書館所属
“中世の古書”

こんな変なドイツ語マニアですが、以後よろしくお付き合いの程、お願い致します。

感謝～私のドイツ人観を変えてくれた日独協会～

高 田 真 生



秋田日独協会40周年を心よりお喜び申し上げます。

私は、ドイツから帰国し、今年がちょうど10周年になります。

10年間の留学生活をしていた時間と、その帰国後の10年では、生活ががらりと大きく変わりました。そして、秋田日独協会の40周年・・・ということは、通算20年、私はこの会に関わらせて頂いていることとなり（年齢がバれてしまいましたが、私の人生の2分の1！）、とても感慨深

く思っております。

日独協会の皆様には、留学中も何かとお世話になっておりましたが、帰国してすぐに、パッサウの青少年スポーツ交流で、2回にわたり通訳を務めさせていただいたり、ワールドゲームズで手伝いさせて頂いたり、貴重な体験をたくさんさせて頂きました。

特にパッサウの方々とお知り合いになったことは、私にとって本当に大きな発見と喜びでした。私は、ずっと北ドイツに住んでいたので、長く生活をしたとはいえ、自分の教授や親しくなったドイツ人以外に対しては、どちらかと言えば、冷たい印象を持っていました。（特にハンブルクは港町なので、すごくサバサバしている気質ではあると分かっていますが・・・）でも、パッサウの皆さんは皆、人なつこくって、良く笑う、とても朗らかな気質だと思いました。

一人の方に「北の方々と全然違うんですね。」と言ったら、「僕たち南では、プロイセン州（ベルリンの辺り）やハンブルク州の人たちのことを”Liebesfeinde”（=愛すべき敵）と言うんだよ。」と言っていました。つまり、同じドイツの人間で愛すべき人々ではあるけれど、水と油のように全然気質が違って、理解し合うのは難しいのだと。なるほど、よく考えると、日本の中でも地方によって、同じことがいえます。

ドイツの方々の税金のお陰で、無料で勉強させて頂いたことと、親切にして下さったドイツの方々への心からの感謝の気持ちを忘れないのは勿論のこと、街並みも本当に美しいけれど、気候だけではなく、心が寒くなる経験も沢山した私は、将来は絶対日本に住む、と心に誓っていたのでした。でも、もし、私がパッサウや南ドイツに留学していたら、そのままドイツに住み着いていたかもしれないと思います。（笑）

5年前から、東京に住んでおり、遠距離会員となりましたが、仕事柄、年3回は秋田に帰っておりますので、これからも末永く、どうぞよろしくお願いいたします。

秋田市ーパッサウ市青少年スポーツ交流の思い出

高 橋 昌 一

1990年（平成2年）7月25日（水）11時50分、ルフトハンザ航空713便への搭乗直後に、「遅しき 若きら連れて パッサウに 今発ちゆかん 成田空港」と出発の感慨を詠み、7月27日（金）午後、秋田市青少年スポーツ交流団は、夏のエネルギーな太陽が燦々と輝き、ぬけるような青空が美しいドイツ連邦共和国バイエルン州・ドナウ、イン、イルツの三河川の合流地点に位置する古都パッサウ市に到着。大いなる可能性に満ちた15名の青少年達が、遙か1万km彼方の姉妹都市の青少年達とスポーツを通して友情を育み、ドイツの生活、文化、習慣を体得しました。

さらに、2年後の1992年（平成4年）8月に再びパッサウを訪れ、“（財）秋田市体育協会”と“パッサウ体育協会1862”との姉妹協会提携盟約書の調印に臨んだわけではありますが、このようなスポーツ面における国際提携は、県内においては、もちろんこれをもって嚆矢とするものであり、また、全国的にみても極めて稀なことであるといわれております。

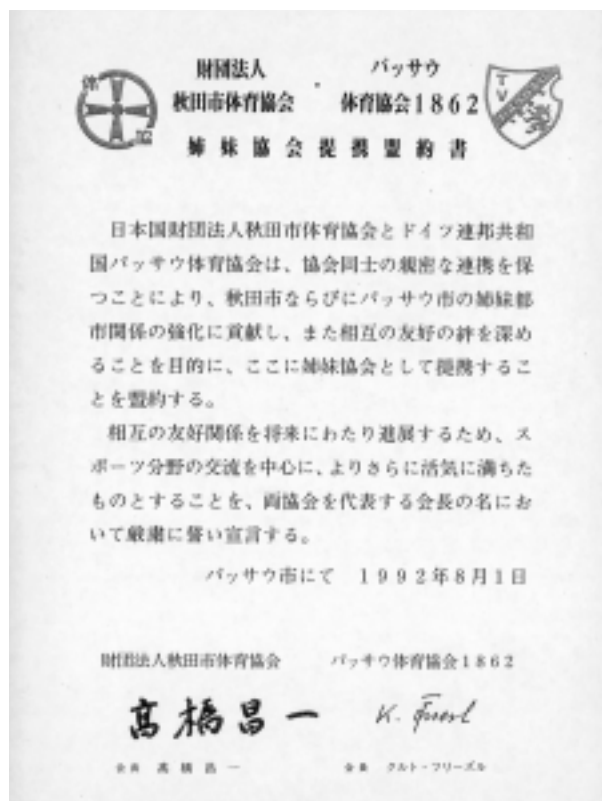
末尾になりますが、「歴史あるヤーン競技場の炎天下 両市の若人らスポーツに汗す」「正庁に両市の人ら集い合い 厳粛に姉妹提携の調印す」と拙作を披露申し上げ、両市の青少年達の間で、未来に向かって幾多の友情が芽生え、数多くの花が咲きますことを念じ、「思い出」といたします。



調印式に臨むK. フリーズル・パッサウ体協会長と私



剣道に挑戦する青少年



姉妹協会提携盟約書 和独両文

一旅行者の垣間みた壁崩壊前のベルリン

戸 澤 一 馬

1989年壁が崩壊してはや22年、今やEUの中でも存在感の大きいドイツ、私は1987年8月、Münchenでの国際整形災害外科会議（8月16日～21日）出席後に、整形外科医10数名と共に周遊した、私にとって最初で最後の社会主義国、東ドイツ（DDR）就中、東ベルリンを思い出している。

8月22日、会議終了の翌朝、Riem空港からBritish Airwayで（Lufthansaは西ベルリンへの乗り入れが禁止されていた）西ベルリンへ。機内のPRパンフレットに西ベルリンで開催する“日本の花火”を見たときは驚いたがすぐ大曲の花火かと気づく。事前に話に聞いた気がしたからである。青空のTegel空港に着いたのがお昼頃、西側世界のショウウインドウとも称された西ベルリン市内は時あたかも種々のイベントを控えて活気に満ち、人々で溢れ、まさに繁栄の絶頂を思わせた。代表的な繁華街Kurfürsten Dammにはあの“日本の花火”のどでかいアーチが街路をまたいでかかっていた。この街路の東端Zoo駅近くには戦災で赤茶けた記念協会が保存されている。市内観光ではFriedrich Iにより建設されたと云う華麗なCharlottenburg宮殿や1936年ベルリンオリンピックのため建設されたOlympia Stadiumを見学。そして有名なベルリンの壁（Mauer）を訪れる。高さ2.5mを超えるコンクリートの壁は東独政府によって1961年8月13日突如Brandenburger Torの閉鎖と同時に建設されて東西ベルリン間の交通は遮断され、東西ドイツ分断の象徴となった。当時、秋田県立中央病院のインターン生だった私は、欧州帰りの前川副院長がこの事実を興奮した口調で私に話した事を鮮明に覚えている。西側からは壁まで自由に往来が出来、多くの観光客が訪れている。所々に物見台があって、そこに昇ると東側がのぞける仕組み。壁面は色とりどりのペンキの落書きでうめ尽くされている。物見台に昇り東側をのぞいた途端、衝撃を覚えた。壁の向こう、東ベルリン側は数百メートルに及ぶ無人地帯（立ち入り禁止）となって静まり返り、ghost townさながら。遙かその先は林立する建物群が見えるののである。壁に近く要所に建つ監視塔には銃をかついだ2人の兵士が見張りを怠らない。観光客が手を振っても反応がない。決死の覚悟でこの壁を西側へ越境する苦労話は度々話題となり、失敗の悲劇も報じられた事である。改めて非情な国家体制間の壁に背筋が凍る思いであった。

夕方、愈々東ベルリンへ。国境検問所はベルリン市内のほぼ中央部Checkpoint Charlieと呼ばれ、我々を乗せたマイクロバスが到着すると若い兵士が乗り込んできてパスポートを回収、点検。この間バスのボンネット、荷物庫、さらに手押しのミラーで車の下を確認する念の入れ様であった。

宿泊のホテルは東ベルリンFriedrich駅に程近いInterhotel Metropolである。最高級のホテルであろう、高級車がずらりと停車している。ホテル内の諸設備、食事など社会主義国のホテルという違和感はない。

翌23日（日）は東ベルリン市内見学である。市街は大きな建物群が並ぶが、店は目につかず派手な広告全くなし。華やかさで西とは好対照をなす。広い街路を通行人も車もめっきり少なく静かである。Pergamon Museumへ。Pergamonとは？昔、世界史で教わった記憶はあるのだが係員に尋ねると現在のトルコだと云う。フラッシュ撮影して叱られる。日本のカメラは明るくない部屋では自動的にblitzenしますと話して許してもらう。ホテルから程近くに鴎外記念館がある。留学中の鴎外が明治20年から帰国までの1年余り住んだベルリンの小さな家である。机や本棚などが保存されている。若い女性が流暢な日本語で説明してくれた。鴎外が帰国後発表した「舞姫」、「うたかたの記」はこの留学体験をもとに執筆されたと云われるが、後者に関してはあのNeuschwanstein城で知られる、時のバイエルン国王Ludwig IIが13.Juni 1886侍医と共にStarnberger Seeで水死体で発見された事を鴎外はMünchen滞在中に知った筈である。

自由見学となった午後は、一人で市内散策をする。まず有名なベルリンのシンボル、Brandenburger Torへ。東西の境界線上の巨大な門で、近づくと何か威圧感を覚える。手前の柵からは中に入れない。人影はまばら。警備兵が緊張感を漂わせる。すぐ左手にソビエト大使館が広い敷地を構えている。ここから東方へ2kmにも及ぶ大通り、Unter Den Lindenをゆっくり歩く。清々しく気分がよい。広い左右の歩道は、日曜日とあってソ連や東欧からの旅行者とおぼしき質素な身なりの人々が往来し、華やいだ雰囲気はない。途中、歩行者に外貨を交換して欲しいと声をかけられる。法で禁止されているからとお断りする。日本の旭日旗をあしらったTシャツ姿の若いカップルと出会う。このシャツにサインして欲しいと云う。これもお断り。何処で手に入れたのか聞くとブダペストだと云う。

大通りの左側には有名なHumboldt大学があり、東へ進むとMarx Engels広場へ。このあたりは教会、美術館、博物館、さらに政府や党の主要な建造物が集まっている。その先は交通の中心Alexander広場で、市民の憩いの場の様だ。Alexander駅の手前に有名なテレビ塔がそびえて展望台を目指す順番待ちの長い行列が続いている。ところで商店が目につかないが、一体市民は日用品をどこで手に入れているのだろうか。旅行者には市内の外貨専用のIntershopがあり、数回利用したが狭い店内は混み合っていた。Alexander駅からFriedrich駅まで電車で帰ることにする。山手線の様に高架を走行する。2駅乗って日本円換算で僅か20円程の安さである。

24日（月）から一行は、専用マイクロバスで東ドイツ国内をErfurt、Weimar、Leipzig、Meißen、Dresden、Potsdamの順に4日間で周遊し、再び西ベルリンに戻った。尚、周遊中の1987年8月25日（火）は東独の国家評議会議長Erich Honeckerの75回目の誕生日だった事を現地の新聞で知った。Neues Deutschland紙の第1面に誕生日の祝意と共に、国民の繁栄と平和を守るため更なる活躍を心から願望するとあった。また世界の各界からの祝辞の中に、日本の経団連斎藤英四郎会長のものもあった。National Zeitung紙は、社会主義統一党中央委員会による全国民の繁栄の遂行と業績を評価するとあり、何れも8頁の紙面の半分以上が関連記事で埋まっていた。

西ベルリン在住の友人の勧めもあり、さらに2日程西ベルリンに滞在し観光地巡りなどで過ごした。確かに陸の孤島であるが、郊外には湖沼や緑豊かな森が多い印象であった。西から東へ通じる道路の境界にはAchtung, Sie verlassen jetzt West-Berlinと注意書きの看板が立っていた。

忘れられないのは、かつてナチス幹部の一人だったRudolf Heßが終身刑をうけて収監されていた英国支配地区Spandauの戦犯収容所をみたことである。警護が物々しく、“近寄ると撃ちます”と警告があり、人々は遠巻きにこの収容所を眺めていた。実はHeßはこの10日程前（8月17日（月））に死亡しており、死因をめぐって様々な憶測が流れていた。学会でMünchenに滞在中、Süddeutsche Zeitung紙はHeßは明らかに自殺だと述べ、週刊誌Der Spiegelにもとりあげられた模様であった。

Münchenから帰国の飛行機も大変な混雑ぶり。一人旅となったお陰で？南廻りLufthansa機のBusiness classの座席を指定される幸運を得て、帰国の途についた。

ドイツ・語

新 泉 美知子



「ドイツ」に最初にふれたのは、大学での第二外国語を履修したことであった。ところが半年後、どうしても格変化を覚えることができずに落ちこぼれてしまった。このことがずっと心に引っかかったまま三十数年が過ぎた。そして2001年ワールドゲームズのためのドイツ語通訳養成講座を受講できる機会を得た。講座ははじめ数十人もの受講者がおり、ある程度以上のレベルの人たちばかりで、さらに、講師の渋谷先生の容赦ない指導のもと、毎回間違えた恥ずかしさで落ち込んで帰っていた。少し年長の仲間とともに「決して休まないこと」と励ましあいながら勉強した。十代で覚えられなかったものが五十代で覚えられたのは嬉しいことであった。こうして二年近く勉強した頃、「語学留学・十数万円」というドイツ旅行のチラシが目に入ってきた。海外旅行など諦めていた私に、「こんなに安く行けるんだよ」と勧める声が聞こえてきた。もう後にはひけなくなり旅行代金のほかに十数万円を支払い手続きを完了した。会話も満足にできないうえ、五十歳を過ぎて一人で一週間のホームステイ。出発前一週間位は緊張と不安ですっかり無口になっていた。

外国に行くと、建築物で日本との歴史や文化の違いに心が震え、言語の違いに気持ちが高揚してくる。

ドイツの人たちは英語を話せるのだが、ドイツ語を話すようにした。そうすると何とか話せるもので、上級ステップへのクラス替えやもっと講座を受けたいが、等の交渉もできた。講座のない午後からは食事、美術館やゲーテハウスの見学等もしたが、毎日行ったのはフランクフルトの三越であった。そこに行くとトイレが使えて、日本人がいた。

電話のプリペイドカードを購入して行ったのだが、使い方がわからず家族への連絡は殆どできなかった。日本ではドイツ国内の洪水のニュースでもちきりだったらしく、母には寿命が三年縮まったと言われている。一人であちこち歩くのが不安で行動範囲がとても狭かったのが心残りである。

その後、娘と共に添乗員が同行する旅行に参加したが、ドイツ人と話すチャンスは殆どなかった。

元気なうちにまたドイツに行き、マイセンの陶器を見て、オペラを鑑賞し、クラシック音楽を聴いてみたいものである



レニ・リーフェンシュタールとヒトラー ～彼女はナチのプロパガンディスト（手先）だったか～

秋田日独協会 常任理事 野 中 和 郎



はじめに

去る9月9日BSプレミアム『側近が見たアドルフ・ヒトラー（パートⅡ）～レニ・リーフェンシュタール・私はヒトラーの愛人ではない～』を観た。

ナチ党大会の記録映画「意志の勝利」やベルリンオリンピックの記録映画「オリンピア」（民族の祭典・美の祭典）等の監督作品で世界的評価を受けたレニ・リーフェンシュタールは「ヒトラーに魂を売った女性プロパガンディストだったか」それとも「類稀な才能を持った最高の女性芸術家だったか」についてナチスドイツのプロパガンダ（政治的意図を持った宣伝）の研究者である東海大教授鳥飼行博氏とドイツ映画の研究家、明治大学教授瀬川裕司氏による対談を通して彼女の実像にせまるものであった。いつの頃からか、漠然とナチの手先、ヒトラーの愛人として刷り込まれていた私のリーフェンシュタール観に対し転機となった番組でもあった。以下短期間であったが前記瀬川裕司著「美の魔力～レニ・リーフェンシュタールの真実」の他彼女に関する資料を漁り、知り得た範囲で彼女の実像にせまってみた。

1. レニ・リーフェンシュタール (Leni Riefenstahl 1902～2003)

～ヒトラーとの出会いとその後～

彼女は1902年ベルリンの裕福な家庭に生まれた。絵画と舞踏を学び舞踏家としてデビュー。膝の故障で舞踏家を断念。あるきっかけで映画界に転身し山岳映画の主演を演じ女優として名声を高め30歳の時（1932）、脚本・監督・主演・製作の4役を^{こな}した山岳映画「青の光」でヴェネツィア国際映画祭で銀賞に輝く。これがヒトラーの目にとまる。一方ヒトラーの熱狂的演説に感銘を受けた彼女はヒトラーに手紙を書いている。即ち1932年これが両者の出会いとなり以後ナチ党の要請で前述「意志の勝利」の製作（1935）、



03.9.10 読売新聞
「レニ・リーフェンシュタールさん死去」の記事より転載

続いて国際オリンピック委員会の依頼で「オリンピア」を製作（1936）することになる。そのドキュメンタリー映画の手法と高い芸術性で世界中の脚光を浴びるが、戦後これが一転しナチ党との協力関係を問われ逮捕、4年に及ぶ獄中生活で精神的ダメージを受ける。

後にナチ党員ではなかったこと、親衛隊支持者でなくユダヤ人迫害に賛成したこともなかったこと等が証明され無罪となるが、それ以降も「ナチのプロパガンディスト」「ヒトラーの愛人」等々のレッテルを貼られ非難と中傷に^{さいな}苛まれ失意の日々を過ごす。数々の映画の企画も潰され70歳にしてアフリカ・スーダンのヌバ族の人間としての自然美に魅せられ、その写真集の出版（1972）、100歳の時（2002）水中映画「原色の海」（ワンダー・アンダー・ウォーター）を製作するなど美

を求め続けた波乱の生涯だった。

2. レニ・リーフェンシュタールの虚像と実像 ～戦後何故彼女だけが叩かれ続けたのか～

ナチ時代露骨な反ユダヤ主義やプロパガンダ映画を世に送ったナチ党員の監督や主演俳優ですら懺悔と謝罪により1950年代初めに活動を許されているのにナチに入党したこともない彼女が長らくドイツ国民から叩かれ責め続けられた最大の原因は何か。瀬川裕司氏によるとそれは「ヒトラーの愛人といった嘘よりも、マスコミへの対応戦略を誤ったことにある」と指摘している。彼女は公式に明確なる謝罪も懺悔も全くしていない。「私は政治に全く関心がない。昔も今も私に興味あるのはただ一つ、美だけ」（レニ・リーフェンシュタールが語る「政治とオリンピック」より）が口ぐせで、いかに責められ叩かれ続けてもそれまでの人生を否定するような言動をあくまで拒否し続けた101年だった。

『彼女の求めた美はあまりにも極端だった。一糸乱れぬナチ党員の行進も、躍動するアスリートたちも彼女のフィルターを通す時美しさが抽出され、そこに醜さや不完全さは存在しない…彼女の作品は常に完璧を求めた…』（「人間と芸術～レニ・リーフェンシュタール～」より一部引用）

このことが結果的にヒトラーの神格化イメージ作りに繋がったことになりプロパガンディストと見做された。ちなみにヒトラーの愛人説について本人自身1930年代訪米中に記者団の質問に対しはっきり否定している。

番組の中で鳥飼氏は「…レニはヒトラーに好かれ彼の資金と権力を借りて大規模な映画作りをした。その中で自分の芸術的才能を生かしていった形では当時の女性として稀に見る野心家であり芸術家であった…」と語っている。また瀬川氏は「…彼女はヒトラーの愛人ではなかったかも知れないが、“その時代と寝た女”、まさにその時のドイツの空気を見事に体現した女性だ…」と評している。彼女の実像がぼんやりと見えてきた思いである。

おわりに

レニ・リーフェンシュタールの対極に共にベルリン生まれで1歳年上の大女優マレーネ・デートリッヒ（1901～1992）がいる。彼女はヒトラーの誘いを断り明確に反ナチの立場をとり1939年アメリカに渡り市民権を得ている。同じドイツの女優として広い世界観を持っていたデートリッヒに対し、映画作りと芸術に対する旺盛な熱意の反面世界観や人権問題に対しあまりにも無関心であったレニ・リーフェンシュタール、この両者の比較論に今新たな関心が湧いて来ている。（2011. 9. 26 脱稿）

再 会

野 村 松 信



2009年は、秋田市がパッサウ市と姉妹都市提携を結び25周年の佳節の年。秋田市長を団長とする市民交流団（約100名）がパッサウ市を訪問し、記念式典、記念行事等の交流で、パッサウ市民の皆さんから盛大な歓迎を受け、再び、多くの楽しい思い出ができた。実は、私は、この機会に、十数年前の半年間の留学中に知り合ったハイデルベルクやミュンヘン等に住む友人、知人とも再会したいと考え、妻と二人だけで行動し、市民交流団の皆さんとは別行動し、現地で合流し、記念行事に参加させていただいた。

10月8日秋田空港を出発し、韓国・仁川空港とド・ゴール空港を経由し、パリから特急列車を乗り継ぎ、ミュンヘンを経由し、パッサウ市に入る行程だった。その出発日当日は、大型の台風18号が秋田市に接近し、予定通り無事出発できるか非常に心配した。しかし、運良く、2時間程のタイミングで、台風の影響は皆無で順調に出発でき、予定通りの行程となった。

ミュンヘンに住む友人達とは、新市庁舎地下のRatskellerで再会。近況を報告しながら、十数年の年月の経過を実感した。大きく仕事環境が変わった方、十数年前は、青少年スポーツ交流団の一員だった少女が成長し、結婚相手と共に会いに来てくれた。お互いの風貌、体格の十数年間の変化を楽しんだ。一杯やりながら歓談していると、十数年が、ほんの二、三年前の事のような印象だった。

パッサウでは、特に、留学中に大変にお世話になったZurさんご家族と再会でき、嬉しかった。近況や子供達の成長の様子を報告し合いながら、変わらない絆のようなものを実感した。市庁舎内での記念式典は、和やかで厳粛なものだった。たまたまテーブルで同席したのがリンツ在住の秋田出身の三浦さんご夫婦。本当に懐かしい再会となった。今度は、秋田で再会したいものである。



ハイデルベルクでは、数年前、秋田大学に留学していたLars君と再会。大学図書館やハイデルベルク城、市街地を案内していただいた。彼の紹介で、市内の射撃クラブにおいて、日本では体験できない実弾射撃を初体験した。

今回の東日本大震災に対し、パッサウ市、パッサウ独日協会、パッサウ独伊協会によるチャリティコンサートを開催等で、500以上の個人、団体から募金が寄せられ、35,000ユーロ（約4百万円）を秋田市へ寄付いただいた。ドイツの人口約5万人の小さな地方都市パッサウ市の皆さんから、遠く離れた異国の地方都市の秋田市へ、こんなにも多くの募金が寄せられた事実は、驚異である。日本の被災者の皆さんの事を自分の事、自国の事のように感じ、多くの皆さんが行動されたと思う。特に、パッサウ独日協会会員の皆さんが、懸命に活動されたと思う。またいつか再び、Zurさん、パッサウ独日協会の皆さんにお会いし、心から感謝を申し上げたい。

再度、ベルリンへ

萩原易雄



暗闇の街並みを割くように立つコンクリート壁突端に身をあずけ、地面から差し伸べた女の手を握り引き上げようとしたその時、東独側の警戒灯が彼女を照らし、銃砲が響いた。リチャード・バートンの手からその手がすると抜けた。彼は壁から身を降ろし、女を抱えた刹那、二弾目がバートンを射抜いた。

ル・カレ原作の映画「寒い国から帰ってきたスパイ」のラストシーンであった。

崩壊2年目の十一月に冷戦時代の東西緊張を戯画化した絵のまだ残る壁を眼にした。同時に、チャーリー検問所には、英、露、仏、そして下段に表記小さく独語で、「あなたはアメリカ管轄区域を離れようとしている。」との警告看板を残していた。それは飛び地の西側区域から東側に入ることが今生の別れを連想させるものであった。その初冬のブランデンブルグ門周辺は、所々敷石も欠け雑草地として広がり、東欧の者達が安価なソビエト製カメラや腕時計を並べ、連ねたバスから嬉々として降り

立つピクニック広場の態であった。そこから僅か所を移したポツダム広場は、ヒトラーが自害した場所の残る、広大な塵埃舞う寒々とした荒れ野であった。

85年五月八日、西ドイツ大統領ヴァイツゼッカーが敗戦四十周年の議会演説で「過去の克服」を課題と語る、その戦後ドイツの負の遺産の様に残されたままのそれら情景は、十八年経た09年10月ベルリン再来訪で眼にした時、一変していた。

壁は統一ドイツの再開発により撤去が進み、その跡には「BERLINER MAUER 1961～1989」の銅製銘板が埋め込まれ嘗ての悲哀を記していた。

ブランデンブルグ門は、その上端の4頭立馬車の先頭から、連合軍統治を悔悟する如く、左右に仏米、前に露大使館を見ている。もはや、屋台も、泥だらけのバスも見当たらず、統一までの陰鬱を消し去るように、垢抜けた姿の観光客や屈託の無い課外授業の若者達に囲まれ、整然とした大通りの中心に、それは鎮座している。

所を移したポツダム広場は統一後の今、ソニー欧州本社、ドイツ鉄道本社等々の大企業が集まり、EUの要衝の地に変貌した。

バイツゼッカーは先の演説の中で、『申命記から』『イスラエルの民は、約束の地に入って新しい歴史の段階を迎えるまでの四十年間、荒れ野に留まっていなければなりません。』と引用し国民に、異民族に、諸外国に向かい、大戦後四十年の歴史の真実を見つめ、そしてここに区切りをつけ、改めて独逸国民の人間としての範を目指したのであった。

敗戦後四十年の間に、ドイツは経済大国として評価されるまでとなっていたが、この演説を期して東西ドイツの統一を成す国民の精神的高揚が確立されたのではなかったか。

一昨年のベルリン来訪は、私にドイツと国民の高邁さを感じさせる機会であった。



海外研修生として赴任したドイツ

早 瀬 眞理子



ベルリンの壁が崩壊（1989. 11. 9）、2年後の1991年、仕事の関係で、グリーンのパスポートをいただき渡独した。金融先進国であるドイツ国、中でもバンクフルトといわれているフランクフルトに海外研修生として訪問することとなった。当時、片言のドイツ語を覚え、ゼスチュアを交えて相手に内容を伝えるが、お返しにいただく言葉の理解が出来ない。文化の違いから生存の基本的欲求以外は伝えることが難しい

ことが分かった。

会議では同時通訳の方にお世話になり研修報告には支障をきたすことなく、事なきを得た。

ドイツの川を観て気付いたのは兩岸の堤防があまり高くはきづかれておらず、しかも岸边まで溢れんばかりの水がひたひたと岸を洗っている。石ころがある河原が殆ど見られない。川幅いっぱいの水が満々と悠々と流れている。大雨が降ったらどうするのだろうか心配になる。ドイツには台風が先ず来ないと森林が点在し降水をいったん吸収するので洪水災害は起きないらしい。自然風土の中の川ひとつとっても国によって違うものだなと感じさせられた。

さて日本人向けレストランに『ユーハイム』や『キックーマン』等があり、同封の写真は『ユーハイム』での夕食風景である。日本の唱歌などドイツ民謡を交えて演奏してくれる。ドリンクは水を含め全て5マルク。私は白ワインを好んでいただいたが、折角のビールの本場たまには豪快に乾杯をしないといけないと思い、夕刻ビアホールに行った。熱気むんむんの中に力強いが哀愁を帯びた独語が飛び交い今ドイツに居るんだを実感したものです。

フランクフルトは戦禍に会い中世の名残は旧市庁舎とニコライ教会のある広場ぐらいでしょうか。休日にはマイン川くだりをゆったりと楽しみ兩岸に点在する古城を観て中世に想いを馳せた。



ドイツで詠んだ歌6首を紹介します。
『いにしえのロマンたたえしマイン川 岸辺の古城にどんなドラマが』

『愁いのみ吾の瞳に潜ませて ベルリンの夜 明け暮れ行けど』

『重厚な歴史の前に佇みて 消え入るような吾の生きざま』

『数々の栄光のあと 歴史人 吾に語り リンデン通り』

『リンデンの葉 黄昏に染まりこし 吾の思考も燃ゆる思いか』

『飛行機雲ブランデンブルグに橋を架け 吾の前途を拓く兆しか』

ビデオのファインダーを通して観たドイツに自我を投影し詠い留めました。

Wir werden uns bestimmt wiedersehen.

二度目のパッサオ

秋田女声合唱団 代表 船 木 孝 子



「シュトデイエン教会」で「わらべ歌」リハーサル

1983年のパッサオ行は「秋田市パッサオ市姉妹提携交流使節団」の任務を持っていた渡欧でした。二度目の目的は「姉妹都市提携10周年友好音楽使節団」として1994年6月26日の出発となりました。

団長は市長石川練二郎氏で、パッサオ市長もハンス・ヒューズル市長に変わり、友好交流の気楽な旅となりました。でも気掛かりはドイツはクラシック音楽の本拠地、秋田の音楽レベルの評価や如何に、と考えると一歩後退気味ですが、ドイツ通の羽川武先生の選曲、指導にブレはありません。お任せルンで参加となりました。

した。

参加団体は秋田室内オーケストラ、青少年オーケストラ、合唱はカンパネラコール、秋田女声合唱団、北都銀行混声合唱団など、約90数名の大編成で渡欧しました。人数も多いので各コースに分かれて出発、私達はスイスのルツェルンに宿泊、ノイシュバンシュタイン城など数ヶ所を巡り、ザルツブルグに立寄り、モーツアルトの生家を見学したり、時間に追われての駆け足観光でした。

パッサオ市に着いたのは6月29日でした。早速リハーサルとの事で、明日の演奏会場の「シュトデイエン教会」に向かいました。扉を開けて「アレッ？これ教会」黒漆塗りの柱、金ピカの装飾の祭壇など、日本の寺院のような感じで戸惑いました。

翌日、教会は一杯の市民の中に、石川市長さんのにこやかなお顔にホッと和みました。

演奏はオーケストラの合奏曲から始まり、合唱は着物姿で「わらべ歌」合奏の「アイネ・クライネ」終曲が「ミサト長調」。芸術、音楽など審美眼にたけたパッサオの方々に、原語で歌う“地球の裏側にある日本”の人の歌唱を評価して頂けるのか、不安を抱きながらも凛として歌い終えました。羽川先生は余裕の微笑みでした。貴重な体験に感謝致します。

翌日は午後4時頃からパッサオ市のお招きの“オーバーハウス”船上パーティーです。すごい豪華客船で、太っちょ爺さんバンドの出迎えて賑々しく、船内はシャンデリアが輝き、自慢のチーズにワインでほろ酔い。岸に建つ古城を望めるうちに宵闇は迫り、船上に出て星の煌めきを眺めては歌が湧き出て、ローレライ、星に願いをなどなど。思い出玉手箱は満杯です。

そして今、時は流れ時代は変わっても、交流の意義の大切さを、改めて感ずる今日この頃です。



平成6年7月2日、姉妹都市提携10周年記念祝賀会船上パーティー、パッサオ市婦人の正装

ホストファミリーとして

渡 辺 彪
富 美



最初は2002年夏、創造芸術家（28歳）、16歳の娘さん。ドイツ語もわからないまま、不安な気持ちでいっぱいでしたが、笑顔と真心があれば、秋田弁でも何とか通じると思い、迎え入れました。田舎の家ですので、カヤを吊って、その上にホタル。彼女達はどんな夢をみてやすんだことやら…？

朝食には、ザルをもって朝露の畑に一緒に行ってトマト、きゅうり等、新鮮な野菜をいっぱい味わっていただきました。又鶏小屋にも行っ

て産み立ての卵を、2人も手伝ってくれ、オムレツ等、毎日楽しい食事でした。

日独協会の皆んなのおかげさまで、2006年10月には、パッサウ市を訪問することができました。重厚な歴史を物語る市庁舎の大きな壁画、今でも目に焼きついています。それに普通の旅行では体験することができないシュテファン大聖堂でのパイプオルガンの奏でるミサにも参加でき、私達にとっては、一生の心に残るいい思い出となりました。この時は2回目のホストファミリーをしたマーティ君の家族みんなが逢いにきてくださり、嬉しく、話に花が咲きました。

会長さんはじめすばらしい人達とのめぐり逢い、色々な経験談も教えていただき、11日間ご一緒できたことは、何にもかえがたい心の財産です。

日独協会の皆さま、本当にありがたく感謝の気持ちでいっぱいです。

去年は姉妹都市交流事業“音の芸術”で来秋されましたトランペッター2人とも、短い4日間、とても有意義な日々でした。生演奏も聞かせていただきましたし、毎晩、枝豆・ナスがっこに秋田の酒、お互いなごやかに交流を深めることができました。

とりたてて何もできない私達ですが、これからも又、協会を通じ、ドイツの人々とかかわっていききたいものだなあと思っています。



役員等名簿

顧問

古村潤二郎

会長

松田至弘

副会長

野口裕子
添野武彦
渋谷義博

事務局長

◎野村松信

理事

◎稲村綾子
◎加賀谷ユウ子
◎川村誠

◎佐藤栄治
◎塩田睦子
◎菅沼隆一
高橋昌一郎
◎野中和郎
◎羽川武茂
◎畠山生
◎土方博子
◎船木孝子
◎松田美博

会計監事

加賀屋誠治
伊東富美子

事務局

菅沼隆

◎は常任理事

会員名簿

相原政志
律子
赤坂睦子
阿部壽美栄
石上ゆき子
石黒こずえ
糸井美樹子
伊藤憲一
伊藤護朗
伊東さわ子
伊藤静子
由紀夫
伊藤強
伊東富美子
伊藤博
美鈴
稲村綾子
今川雄策
岩井真二
岩井淑子
梅津嘉弘
戎屋鉾希

遠藤博子
近江喜博
麗子
大井千佳子
大塚一雄
大森和美子
小倉道子
小野幸彦
加賀千咲子
加賀谷有秀
加賀屋誠治
加賀谷亨
加賀谷ユウ子
育代子
悦子
金川村誠
菊地達雄
杏澤キミ
工藤千恵子
桑名秀明
後藤繁雄
小松勝久

古村潤二郎
アサ
今香華
近藤重昭
齋藤正喜
嵯峨泰典
佐川光男
子
櫻庭星治
佐々木常雄
佐々木英子
佐々木順子
佐藤栄治
佐藤和子
佐藤妙子
佐藤勤一
佐藤紀子
佐藤雅由美子
佐藤東亜子
椎川和恵
塩田睦子

会員名簿

塩屋延子
志田恵子
洪谷義博
菅沼隆
菅原清
菅原満里子
杉本光子
鈴木健雄
鈴木道孝子
鈴木裕一子
簾内智武彦
添野真生
高田堂裕
高高橋昌一子
高橋雄悦
高畑美穂
武石敏之彦
武田昌理子
千葉真子
辻馬達雄
對井武美
筒井きらら
坪井澤一馬
戸島シゲ
豊谷章
富泉俊堯
中澤善徳
長田直和
中野藤吾
仲野繁穂
成田美知子
新泉真琴
仁村裕子
野口中郎
野歌子
野村松信
羽川武

萩原易雄
畠山茂子
林恭子
早瀬真理子
土方博生
深澤美和子
藤井吉彦
藤原悦子
藤原理佐子
藤原強丸
船木孝子
古田重明
保坂若子
星野和親
堀達也
堀野久
本和田則
本間真紀子
升谷恵美子
松浦隆一
松尾重樹
松岡一志
松田美博
松田弘子
松平直哉
松村讓裕
三浦稔彦
三浦清勝
三浦儀
三宅一
三宅美一郎
茂川元竹
森田知明
安原せい子
柳田忍
吉辺彪
渡貫勤
綿貫勤
アンネリーゼ・デーケン

㈱秋田魁新報社
㈱JTB東北秋田支店
日本エアーサービス
秋田営業所
㈱日本旅行東北秋田支店

秋田日独協会規約

- 第1条 本会は秋田日独協会と称し、日独両国親善のために理解と熱意を持つ有志で組織する。
- 第2条 本会の事務局は秋田市に置く。
- 第3条 本会は日独両国民相互の協力により、文化の交流など両国の理解と親善に寄与することを目的とする。
- 第4条 本会は前条の目的を達成するため次の事業を行う。
- 1 日独両国民の理解と親善のための集会、講演会、映画界、研究会
 - 2 会報、参考資料等の発行または配布
 - 3 留学生の推薦、ドイツ人との交歓等、前条の目的を達成するために必要な事項
- 第5条 本会に次の役員をおく。役員は総会で選出、任期は2年とし再任を妨げない。
- 会 長 1名
- 副会長 4名以内
- 理 事 若干名（うち常任理事若干名）
- 会計監事 2名
- 第6条 会長は本会を代表し、会務を総理する。会長に事故あるときは副会長がその職務を代行する。常任理事は理事の互選により選任し会務を掌理する。理事は理事会を構成し、本会の業務を議決し執行する。会計監事は会計を監査する。
- 第7条 本会に事務局をおく。事務局長は理事の中から会長が任命し会務を処理する。
- 第8条 理事会の推薦により名誉会長、名誉会員、参与、特別顧問および顧問をおくことができる。
- 第9条 定時総会は年1回会長が招集する。必要に応じて臨時総会を開くことができる。理事会は会長が招集する。
- 第10条 会員は、通常会員、法人会員、特別会員の3種とする。会費は年額一口、通常会員一口三千円、法人会員一口一万円とする。特別会員は県内在住または来訪ドイツ人を会長が推薦し会費は徴収しない。ただし通常会員のうち学生は千円とする。
- 第11条 本会の経費は会費、寄付金、その他収入をもってあてる。会計年度は4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。

附則 この規約は、昭和47年2月24日から実施する。

附則 この規約は、昭和56年4月1日から実施する。

附則 この規約は、昭和58年4月1日から実施する。

附則 この規約は、平成3年4月1日から実施する。

附則 この規約は、平成5年4月1日から実施する。

秋田日独協会創立40周年記念誌

発 行・秋田日独協会

発行日・2011年11月

事務局・秋田市大町6丁目3-47

印 刷・株松原印刷社



秋田日独協会

Japanisch-Deutsche Gesellschaft Akita

www.jdg-akita.org

